駅前通り

十数年ぶりに日田駅に降り立った。駅前からのびる遊歩道がすがすがしい。この町は玄関口ですでに旅人をとらえてくれる。そして、たしかに日田の街々は旅心を和ませてくれた。

それにしても、わが住む別府の玄関口、駅前通りはどうだろう。私は日ごろこの通りを敬遠している。歩道も車道も斜めに傾いて、足の衰えた私には危ないからである。大阪から移り住んだ老父がいつもこぼしていた。「別府の道は怖い。あれは道じゃない」。駅前通りを筆頭に、かまぼこ型の道路が市をおおいつくしている。奇妙な道で、ここには人間性のかけらもうかがえない。乳母車や車いすが安全に通れるのが道というものだから。市は「身障者福祉モデル都市」と宣伝してきた。車いすをひとり必死にこいでいる姿を見るとき、その宣伝のむなしさがいよいよ強く胸中をよぎっていく。

では、県の玄関大分駅前は噴水もあって少しはましだと言えるだろうか。駅を出て左側の歩道を歩くと、だれだって腹だたしくなる。

自転車群が歩道を占領している最悪の風景も、たしかにそうだ。その取り締まりがトップ記事になるほどである。しかし、自転車は通勤者や高校生庶民の足だから、私はそれに目くじらを立てる気にはなれない。あのていどの自転車置き場ぐらいも用意しない行政の貧困こそ、まず責められるべきであろう。

この自転車たちと何十年も向かい合い、その不法を非難しているかもしれない商店たちこそ、一番おかしな存在だ。自転車の何十台以上の歩道を占拠し、商品を陳列し、歩行者に危害を加えかねないありさまはどうか。ここには厚顔の陳列が併存している。立て看板もしていないホテルやパチンコ屋さんはご立派。

ああ、一村一品の掛け声のむなしさが、ここにも吹き渡っている。

（一九八八年三月二十四日）